

East Asian Modernism Studies Project- Workshop at Kyushu University

Date: July 12 – 15, 2019

Venue: Kyushu University Nishijin Plaza, Fukuoka City

Topic: Sharing the Current Agendas on East Asian Modernism Studies



**Modernism and Surrealism
in Korea from the 1930s to the 1940s**

**Ewha Womans Univ.
Jinhee Kim**

INTRO

Surrealism was accepted and appeared in the Korean literary world of the 1930s. It was at the core of modern poetry's changes and developments, and it always accompanied the quest for 'new' poetry. However, the idea has not been discussed in extent until recently, and thus, its roles and values in the history of literature were insufficiently assessed. One of the reasons behind this is that modernism has been understood in Korea mostly in its English context, and such tendency has limited Korean academics in fully grasping European Surrealism. It is also valid to say that Korean understanding of modernism failed to look more broadly, into Japan or East Asia. In the history of Korean poetry, the 1930s was the time when modernism was actively discussed in poetry, mainly by poets like Kim Ki-Rim and Yi-Sang. Surrealism had a strong presence in their modernist poetics, and this was in line with the Surrealist trend in East Asian literary field of the time. In this regard, it is possible to recognize from various activities in the contemporary literary world that surrealism was accepted and expanded much more fully than had been discussed in literary history, not to mention its influence on the development of modern poetry. Despite its significance in Korean poetry, research on surrealism in Korea is still at an initial stage with related materials still being gathered and analyzed. In this circumstance, I recognized the necessity to view surrealism as a broader phenomenon of the 1930s that was not limited to Korea or Japan but affected entire East Asia, and this research was conducted upon such point of view.

table of contents

1. 韓国現代詩の発展と超現実主義
2. モダニズムと超現実主義の基礎としての金起林
3. 超現実主義同人誌『三四文学』と李箱
4. 平壤の『断層』と咸鏡北道鏡城の『獏』
5. 満州モダニズム, 「満鮮日報」と『詩現実同集』
6. 解放後の超現実主義と金洙暎



1. 韓国現代詩の発展と超現実主義

<問題意識>

超現実主義の研究の対象を1930年代初頭の金起林（キム・ギリム）の超現実主義文学論から解放前後の韓国と北朝鮮の超現実主義の活動までを含む**時間的な拡張**が必要だと考えている。

（1960年代の金洙暎（キム・スヨン）も参与詩論の中核で超現実主義を召喚する）第二に、**空間的、地域的な拡大**の問題である。これは一次的には、日本の超現実主義との比較研究を意味する一方、1930年代半ばを過ぎてからは超現実主義がソウル（京城）から平壤、咸鏡北道鏡城、満州にまで拡張されるという事実注目する必要がある。このようなアプローチは1930年代半ば以後、超現実主義が京城中心の中央文壇を脱したという点を示す一方、このような理由からこれまで京城を中心とする「三四文学」と李箱だけが研究対象になったということも示す。第三に、**同人活動として超現実主義についての注目**である。韓国文学史を見ると、さまざまな同人誌、あるいは雑誌が登場するが、超現実主義ほど自分の色を鮮明にする試みはほとんどなかった。これらは当代の画壇、画家たちと一緒に同人意識を強化して同人誌を出版したという点で、集団的な芸術活動の特性を明らかに示している。

2.モダニズムと超現実主義の基礎としての金起林

金起林は超現実主義が持っていた無意識の世界を秩序化するメカニズムを詩の記述と言語作業に収容して感想を克服して秩序化する主知的態度に拡張させることで、現代詩の原理として理解するようにした。 その一方で、作品で新しい秩序を作る作業とは現実に対する新しい立場と秩序を作ることなので、現実に対しての積極的な関心と文明批判が主知的態度の中になければならないということを明らかに強調した。1930年代金起林が注目した超現実主義の詩的認識と方法論、そして歴史性と時代性は以後韓国文学史の超現実主義で持続的に受け継がれて論議を拡張していく。

The intellectual and conscious production of the poet, the poet 's intellectual attitude(主知的 態度)is the main principle of modern poetry. The attention to reality and criticism of civilization must be in the intellectual attitude

References

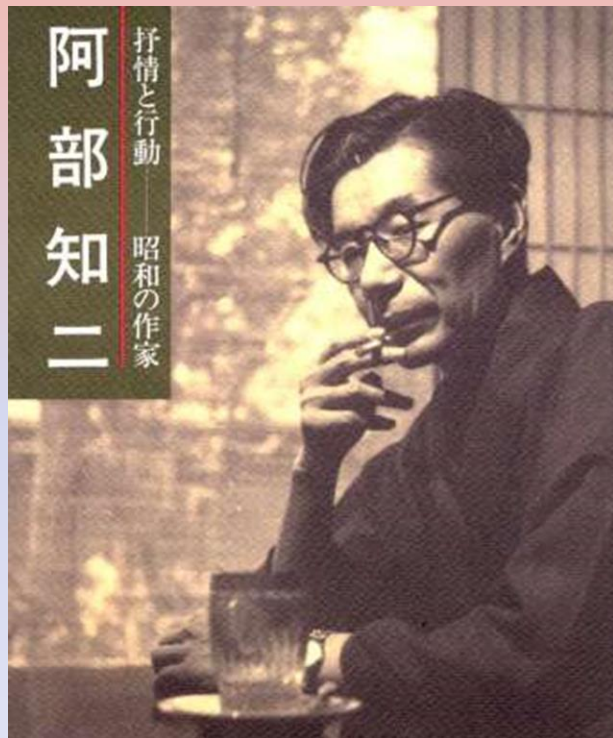
- 金眞禧, 「金起林の超現実主義論とモダニズム研究I」 2016
金起林, 『詩論』 白楊堂, 1947.
阿部知二, 『主知的文学論』, 東京:厚生閣書店, 1930.
春山行夫, 『詩の研究』, 東京:厚生閣書店, 1930.



金起林, Kim, Kirim(1908~?)



2. モダニズムと超現実主義の基礎としての金起林



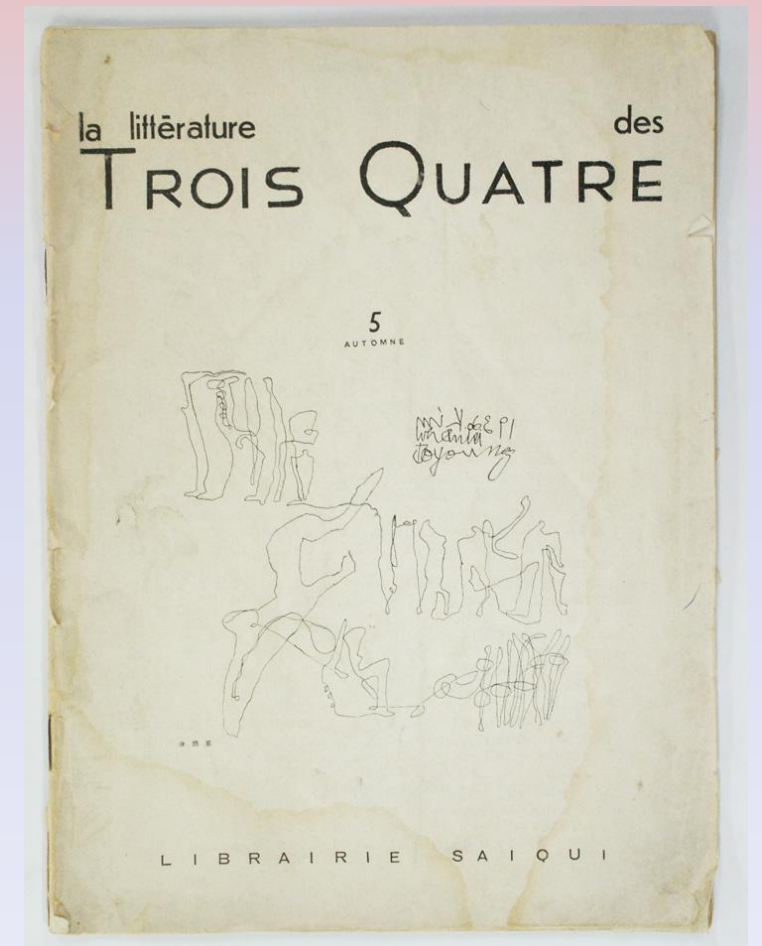
春山行夫

「詩と詩論」の阿部知二や春山行夫も主知という用語を使用した。阿部知二は主知が英米モダニズムのIntellectualismとは明らかに異なる傾向や態度を意味すると言いながら金起林と同様に主知的態度の中核とは、深い混沌を緊密な秩序によって表現するものであり、詩は製作されるもの、意識的に作るものだということを強調した。

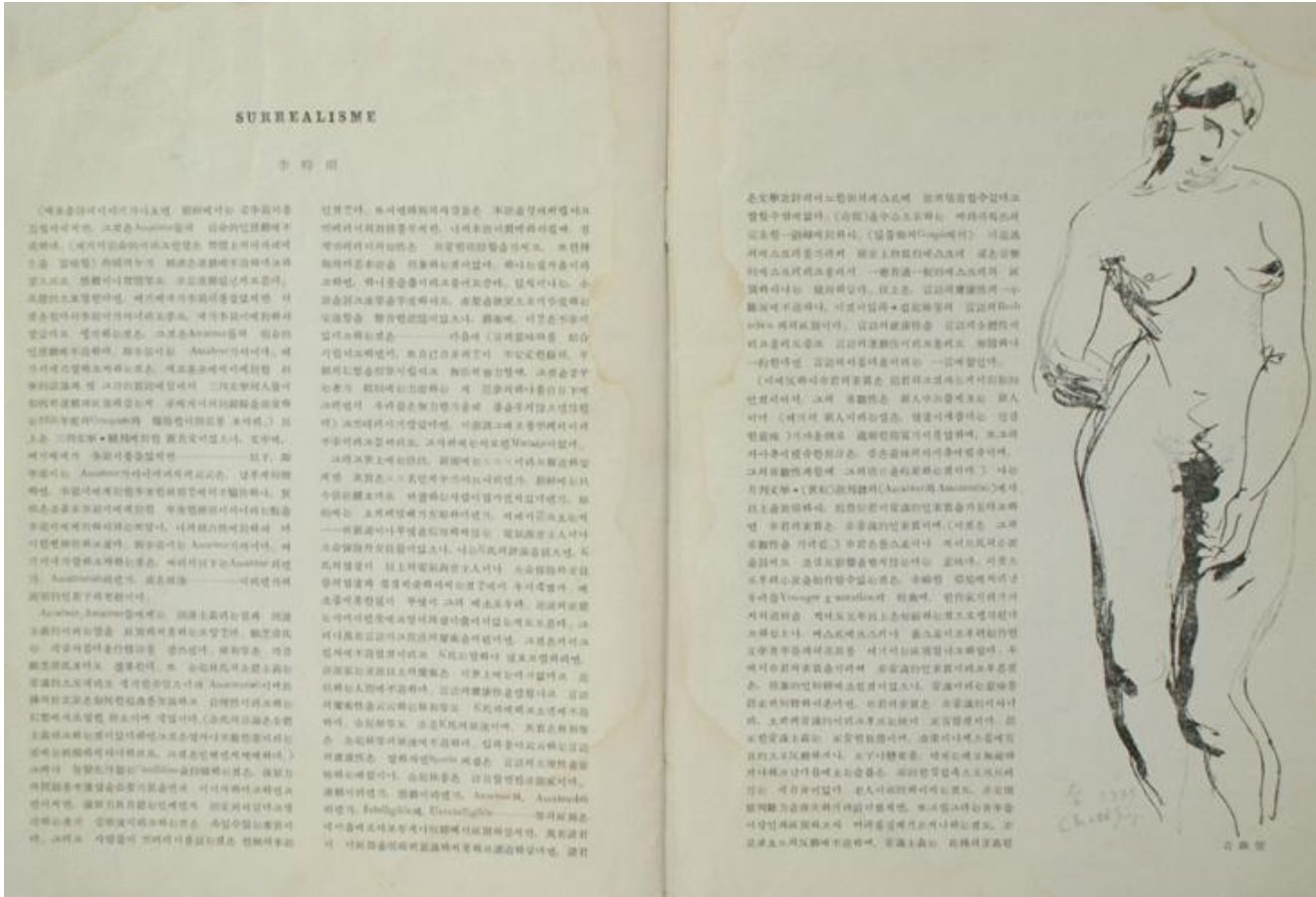
3. 三四文学, *Three, Four Literature* (1934.9-1937.1) 總6輯發行

Reference

金眞禧, 「1930年代モダニズムネットワークと拠点としての同人誌 - モダニズム同人誌 <詩と小説>、<三四文学>を中心に」, 2021.



3. 『三四文学』, *Three, Four Literature*

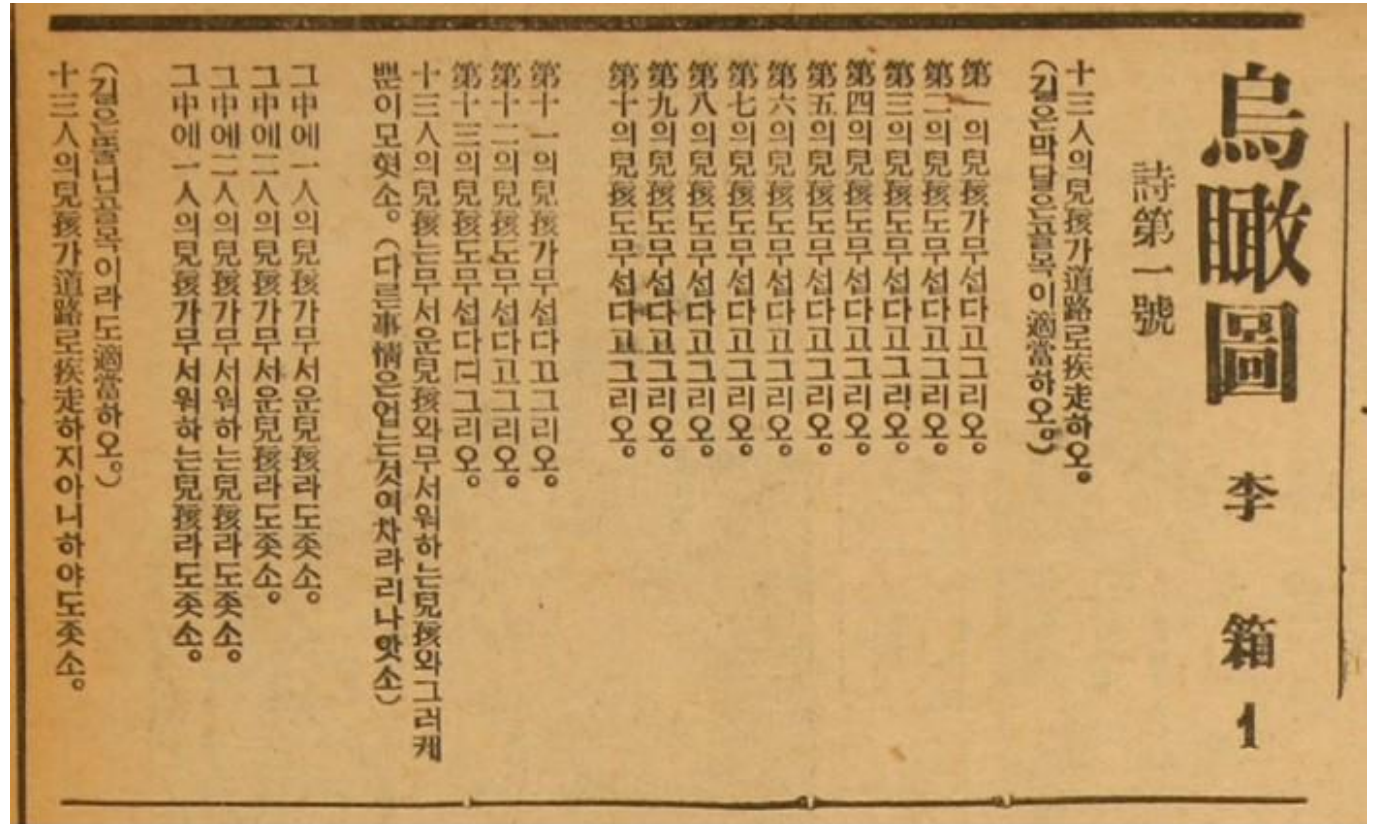
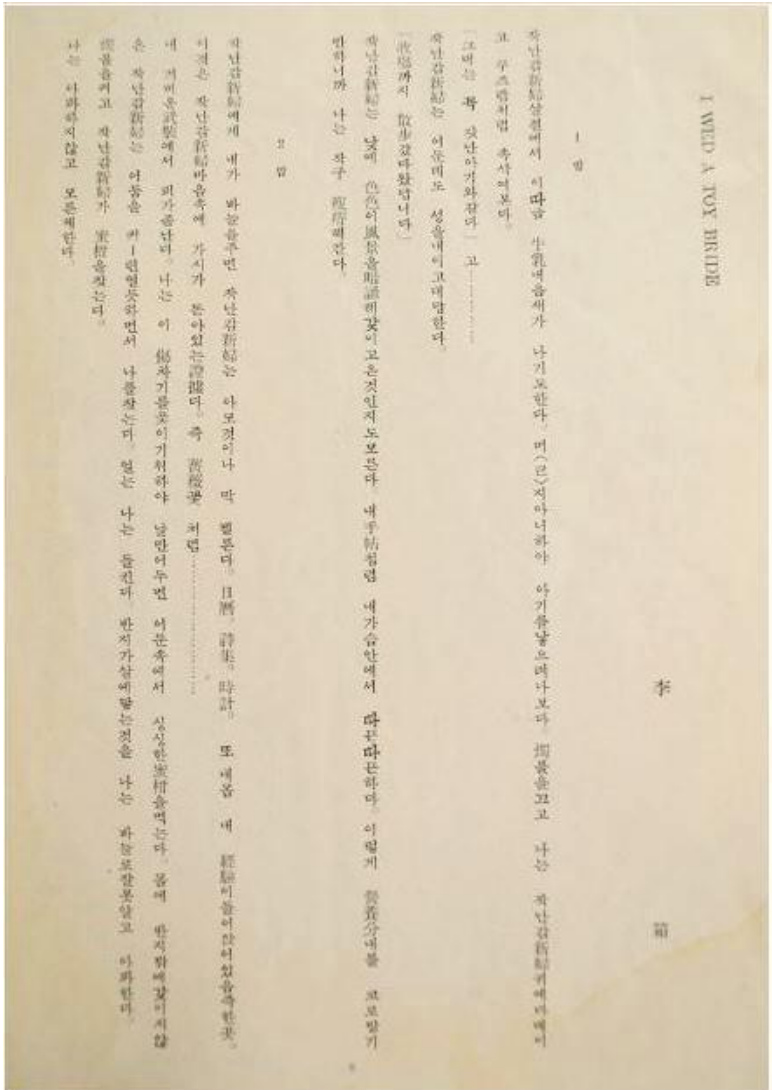


李時雨はフォルム、すなわち形態を介して詩のポエジを思惟しているが、これは同時期金起林が「現代詩の記述」(1935)で形態美を追求した春山行夫のフォーマリズム創作について「フォーマリズムは詩の偶然的な美であり、本質的なものではない」という批判を念頭に置いた意見に見える。金起林は文字の形、陰影、數、變化、運動などの効果を追求する傾向が超現實主義の本領ではないと思ったが、これは言語とイメージを介して實際の生と現實の秩序を創造しようとした金起林の世界觀から始まったと思われる。

“It is poesie that the new order destroys the present order. This is not only spiritual, but complete with methodology, the form and the destruction of forms of poetry”

3. 『三四文学』& 李箱

「I WED A TOY BRIDE」



三四文学の同人たちは方法論を通じて詩のポエジに到達しようとしたし、このような観点から「烏瞰図（オガンド）」を介して詩の方法論としてのフォーマルリズムを実験的に求めていた李箱を最高の詩人として評価した。
 Lee, Sang was highly evaluated because he used formalism as a methodology.

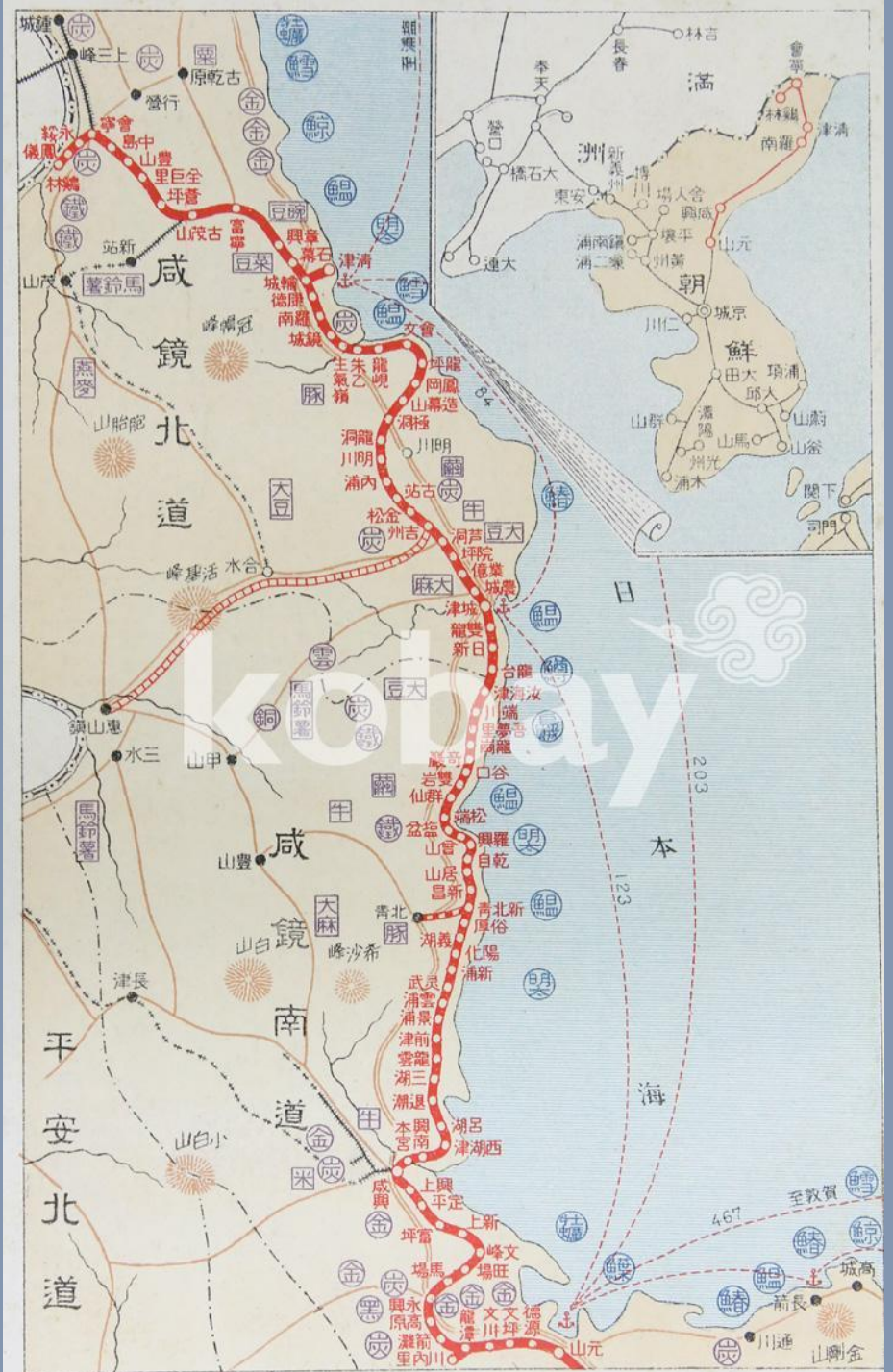
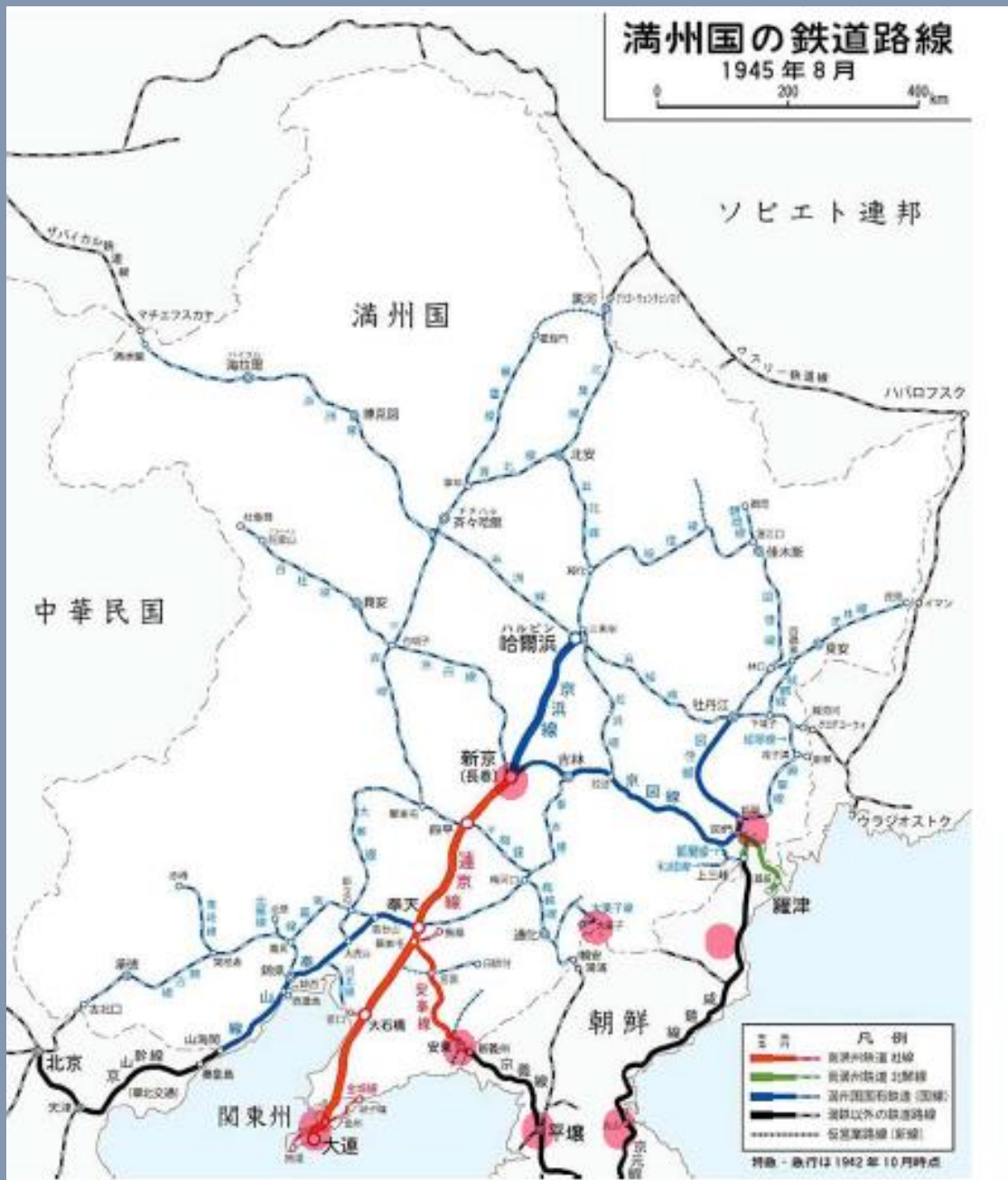
4.平壤の「断層」と咸鏡北道鏡城の『獏』

1930年代半ば以後、様々な小雑誌が出版され始めたが、特に国境地域や満州を含む北方地域での文芸活動が目立つ。超現実主義、新心理主義など幅広くモダニズムの傾向を持つ同人誌や詩集などが発刊されて、例えば、鴨緑江沿岸の中江鎮（チュウコウチン）の「詩建設」（1936）、間島の「北郷」（1936）、平壤の「断層」（1937）、咸鏡北道清津（チョンジン）の「獏」（1938）、元山（ウォンサン）の「草原」（1940）を含んで満州新京の「満鮮日報」の<詩現実同人>や「在満朝鮮詩人集」「満州詩人集」などである。

このように、1930年代半ばを過ぎてから北方地域で活発な芸術活動が開始されて、特に超現実主義などを含むモダンな芸術運動の風が吹くされた理由は何かは考えてみる必要がある。

『満州モダン』（文学と知性社、2016）の著者韓錫政（ハン・ソクジョン）は満州国が建国された後、国境地域でその経済的、政治的、文化的影響力が開始されたと主張しているが、満州芸術の雰囲気は国境地域はもちろん、朝鮮半島内部にまで及ぼすことができるという点で妥当性があると考えられる。

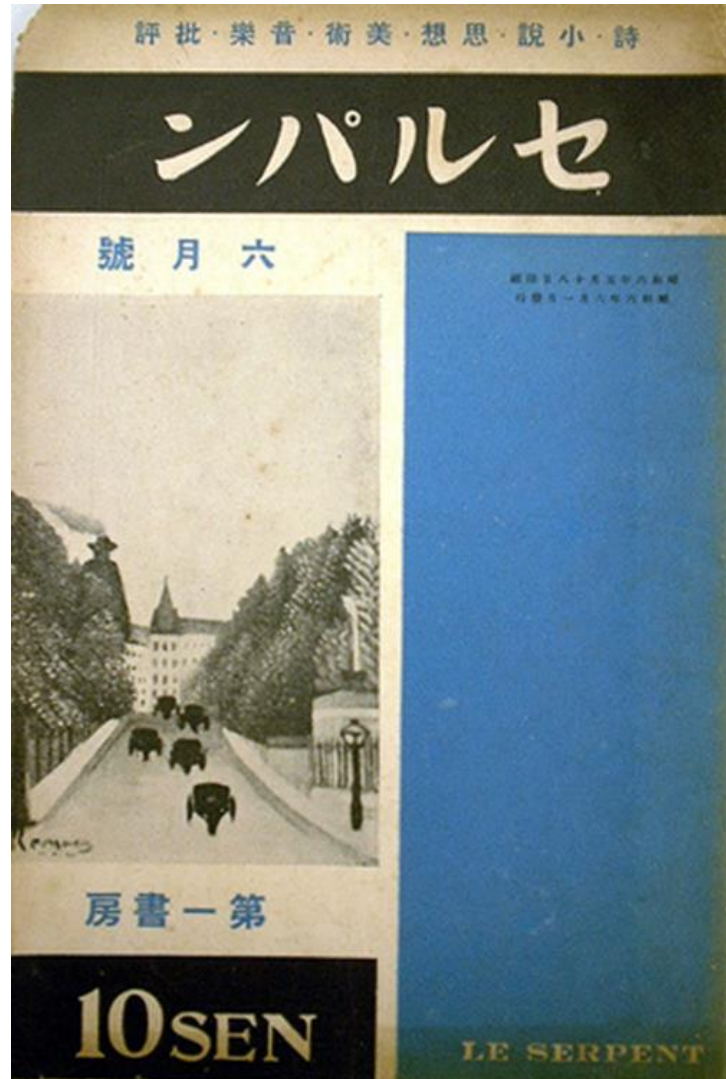
Pink color mark : magazine publishing area



4.平壤の「断層」』*La Dislocation* (1937.4-1940.6) 總 4 輯 發行

Reference

金眞禧, 「1930年代後半のモダニズムの拡大と南北韓詩文学史の再考-同人誌『断層』(1937)と『獮』(1938)を中心に」, 2022.

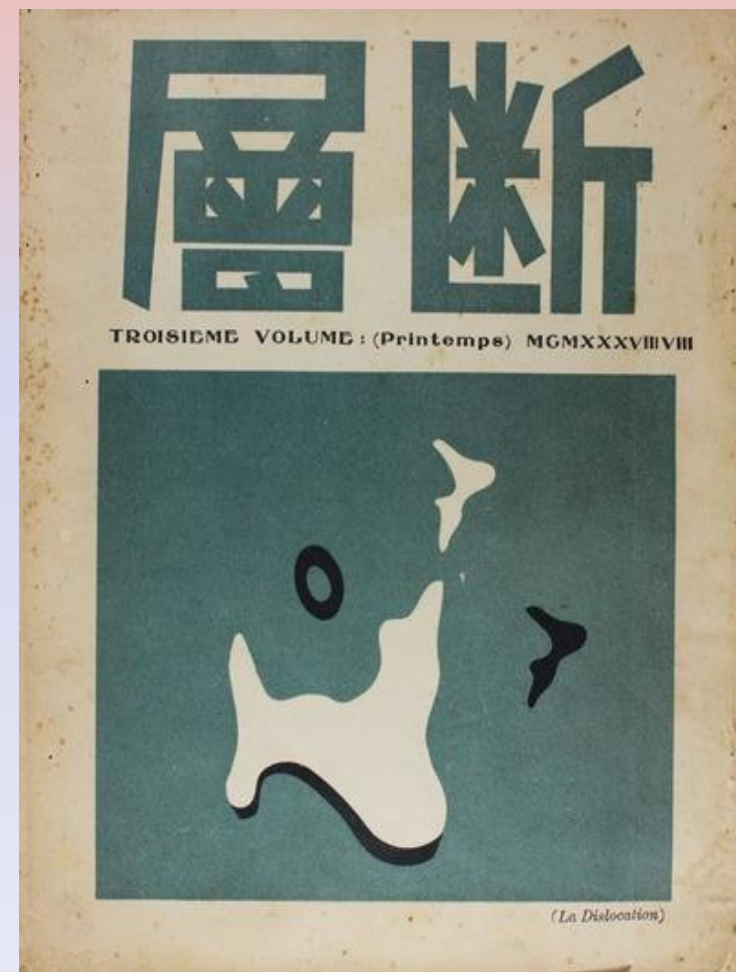


北方地域で行われた同人活動の特徴は、モダニズム、代表的に超現実主義的な傾向を帯びることであり、画家や画壇との協力の中で行われたこと、そして満州の芸術場の影響を受けたということである。

本研究者が確認した限りでは、これらの詩が「三四文学」や李箱の作品よりも憂鬱で荒廃した内面の意識を示しているが、このような意識の根底に現実に対する問題意識が置かれていることを読み取ることができた。

4. 平壤の「断層」*La Dislocation*

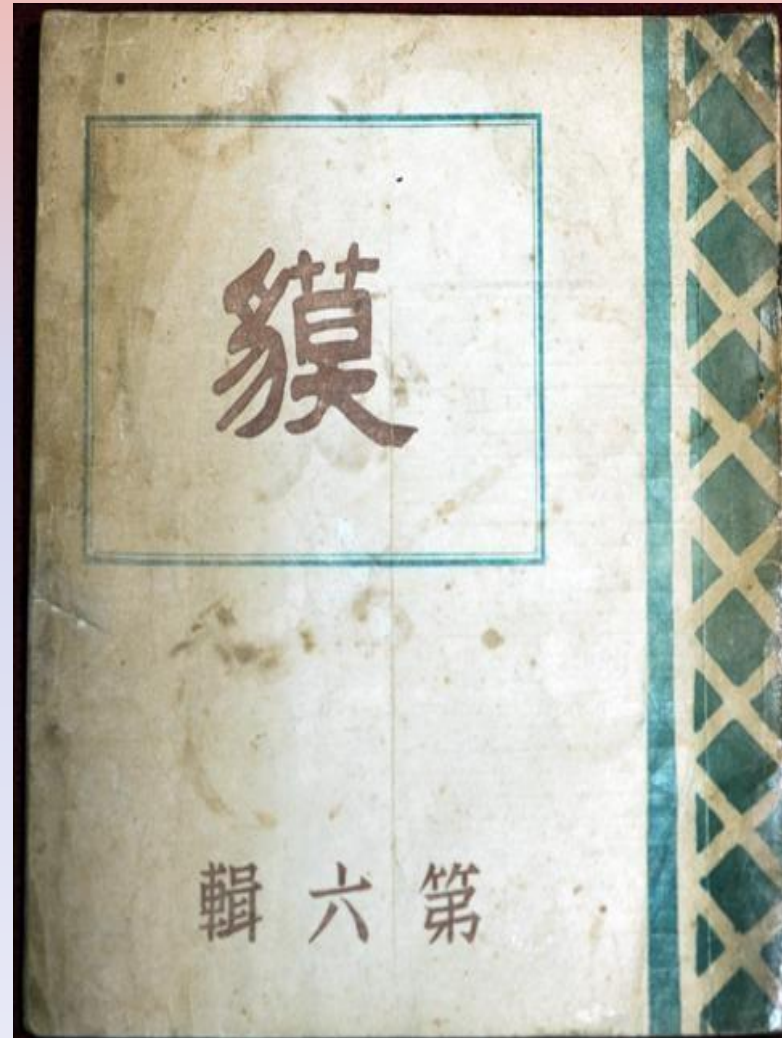
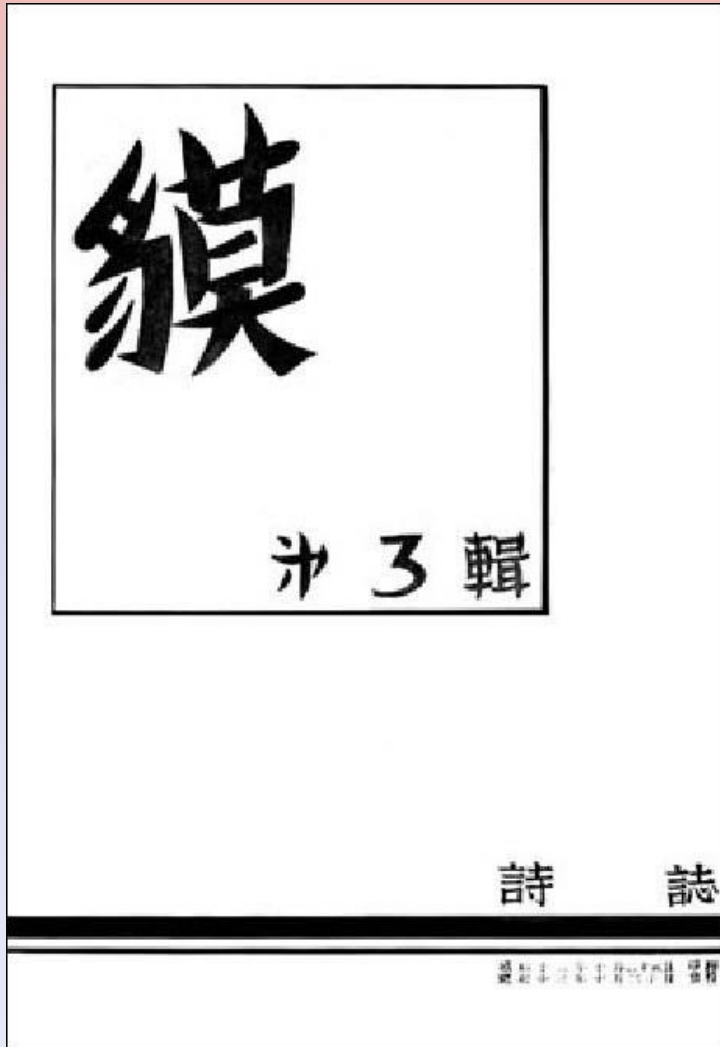
同人畫家金秉騏 表紙製作



4. 咸鏡北道鏡城の『獏』 *Maek*: 詩 中心(1938.6-1939.11) 總 6輯 發行

Reference

金眞禧, 「『獏』 5集の発掘と徐廷柱の新しい詩 「妖術」」, 2022.



1938年発刊が始まった『獏』は1-4集と6集だけ知られてきたが、最近5集が発掘されて合計6冊になった。

朝鮮半島南部の既成詩人まで包括したこの雑誌は、1930年代後半詩の分野で注目すべき同人誌で、朝鮮半島の南-北の地域と満州の文献を繋いでくれた雑誌という点でも意味が大きい。

作品の傾向は多様だと言えますが、同人誌の中心が超現実主義を主張した金北原であり、5集と6集の編集後期を見ると同人誌のアイデンティティを超現実主義を根幹とするモダニズム芸術運動と考えているようです。

5. 満州モダニズム、「満鮮日報」と『詩現実同人集』

References

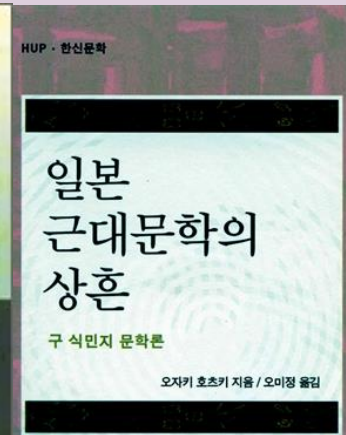
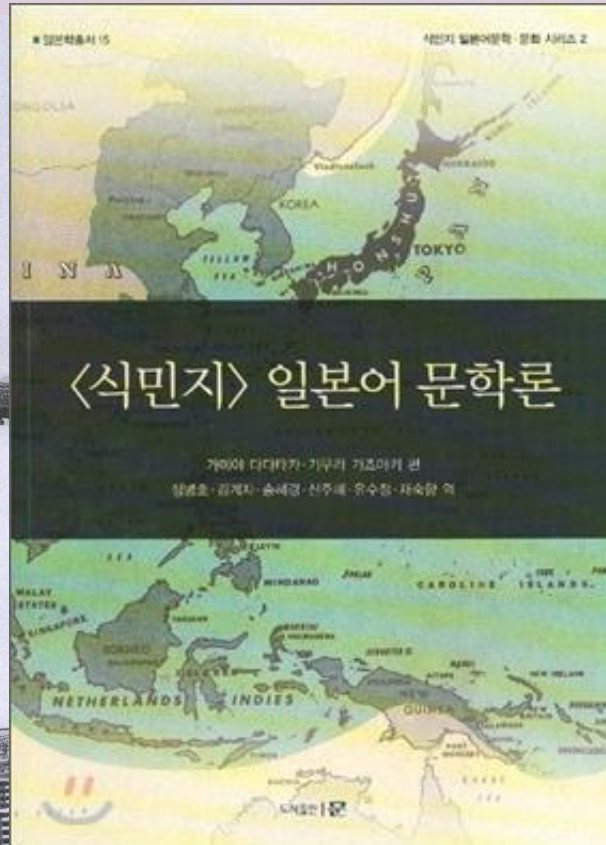
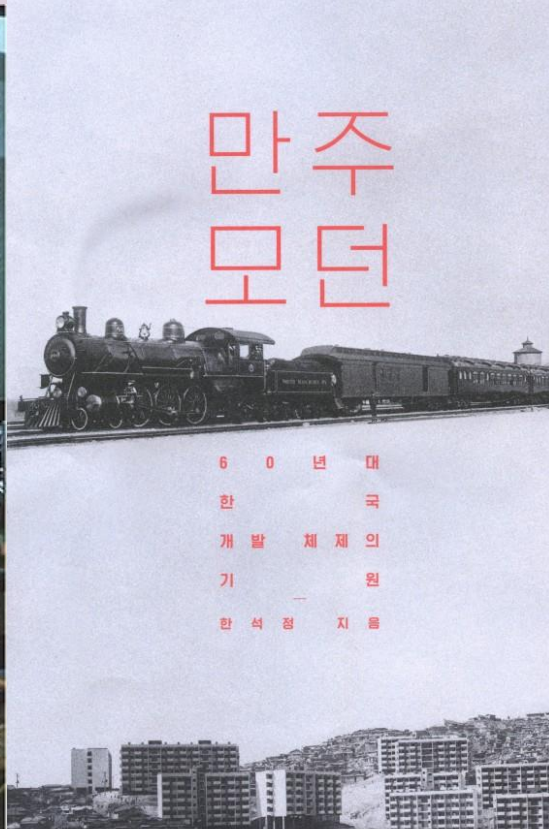
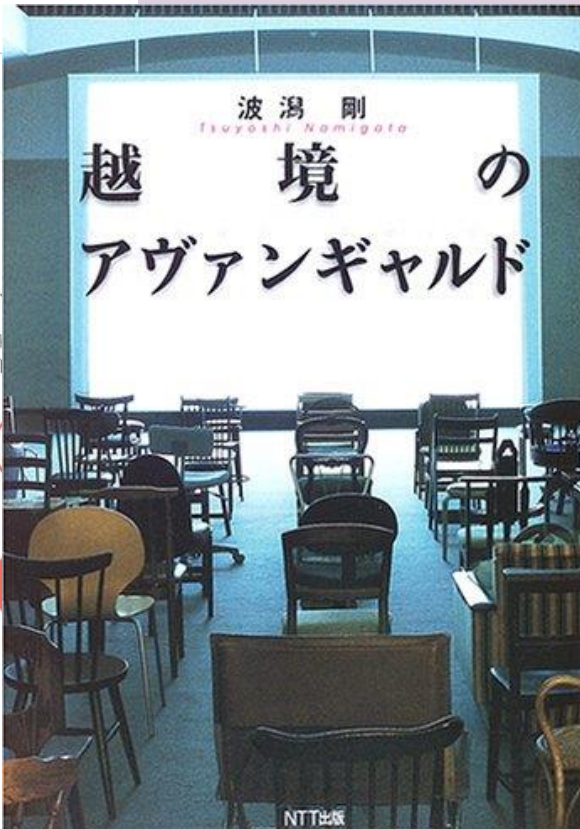
波瀨剛, 『越境のアヴァンギャルド』 2005.

西村將洋, 「満州文学からアバンギャルドへ-在満州日本人と言語表現」, 『植民地日本文学論』 2010.

尾崎秀樹, オ・ミジョン訳, 『日本近代文学の傷痕-舊植民地文学論』 2013.

韓錫政, 『満州モダン』 2016.

金眞禧, 「『満鮮日報』に掲載された「詩現実同人集」と同人活動の文学史的意義」 2018.



5. 満州モダニズム、「満鮮日報」と『詩現実同人集』

<詩現実同人>と一緒に考えてみることは、北方地域の文人たちの発表媒体としての「満鮮日報」である。小説家安壽吉（アン・スギル）は、新京の「満鮮日報」に咸鏡北道清津のシュールリアリストたちが小包で原稿を送ったと記憶しているが、これは「獏」の同人たちが1939年以後同人誌が出版できない状況で、「満鮮日報」を発表媒体にしたことを知ることができる。

「満鮮日報」は、韓半島はもちろん満州各地に散在している作家たちの相互連絡の拠点であり、作品発表の媒体となった。

1940年代、現実的にも、韓半島内で朝鮮語で作品を発表できる媒体が皆無したことを考慮すれば「満鮮日報」学芸面は日本末期文学史の重要な拠点に違いない。





<詩現実同人>の詩に超現実主義の絵画の画像が登場するのは、当時の国境と満州地域の芸術状況と関連したと思われる。「断層」の同人であった文學洙は、日本の「自由美術家協会」（1937）で注目されていた画家で、「貌」の同人たちと似合った咸鏡北道清津出身の画家金河鍵（キム・ハゴン）は超現実主義を標榜しながら福沢一郎、瀧口修造などが創立した「美術文化協会」（1939）のメンバーだった。金河鍵の作品はサルバドール・ダリ、ジョルジュ・デ・キリコなどの象徴性に似た超現実主義絵画に評価されるという点で、詩人と画家たちの芸術的交流が可能だったと思われる



5. 滿州モダニズム、「滿鮮日報」と『詩現實同人集』

『滿鮮日報』に掲載された「詩現實同人集」

詩 壇

申 東 哲 李 瑑 馨 合作

生活의 市街

『詩現實』同人集 (1)

白裝甲의 秩序가 市街에서 飛덕일뿐이였다
醒母마리아의 市場으로 가자
醒母마리아의 微笑의 市場으로 가자
許可된 現實의 眞空의 内臟에서
시커먼 그리고 새하얀 그것도아닌
眞空의 液體 엿이나 液體도 아니었다
자! 그러면 出發하자
花粉의 倫理도 아닌
白晝의 太陽도 아닌
시커먼 새하얀 그것도 아닌
遊戯의 遊戯는 永遠한 午前을 遊戯한다
白裝甲의 이마에는 靑나비의 花안자
의 生殖術을 구경한다
그림으로
時間은 時計는 모1은 現象
밤의 외부 속에는 夜光虫의 神話가 飛어난다
밤의 외부속에서 銀河가 發狂한다
의 呼吸이 颯々한다

一九四〇 八二〇 於門

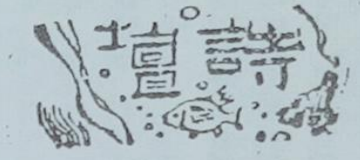
二七	福州	德	州
二八	興城	本	溪湖
二九	移動	鳳	凰城
三〇	朝陽	安	東

이런少女의情操教育은먼저
童話로부리라는「이런이協和
會」(新京童話協會가 國都에設

詩現實同人集 (5)

비들기 날으다

金北原



山岳 山岳 山岳
여기는 바닷바람의 一丁目
조이스會閣 유익사즈또이를
크하면
S 嬢의 第一號室
구두가잇섯다

S 嬢의 第二號室 上衣가잇섯다
S 嬢의 第三號室 回轉椅子가잇섯다
S 嬢의 第四號室 예드가잇섯다
S 嬢의 第五號室 體溫이잇섯다
그는水仙花가 조았다
그는水仙花의 花瓣이 조았다
그는水仙花의 花粉이 조았다
그는水仙花를 반공에 노았다
반공에 푸른 眺望이잇섯다
반공에 아름이
반공에 美少年이잇섯다
S 嬢은 美少年이 조았다
美少年은 S 嬢이실타
美少年은 美少年이 戀慕를타
美少年이 반공에잇지 안었다
美少年이 반공을여나든날
S 嬢은 花盆을 거더차다
水仙花의 形骸가 파수어섯다
반구락이 紅海를 홀렀다
이윽고 S 嬢은 美少年을 歸納하다.

生하였다
나을發會
時早타
和會首郊
東軍長谷
여 露山
有餘名出
되었다.
新京童
軍에設立
의少年、
키와는데
도 滿系
으로하고
나라 全
의考究
童話讀本
童의情操
여잇서
高의作製
하기로되
그리고
氏를推戴
은左의
△(那說)
奧村義
神志都
藤山一
善造
△(役員)
木本々
雄、
盛弘子
伊與子
下右
△(常任)
△(幹事)
雄、
伊藤
澤一

1940年シュールリアリズムの創作方法としてのフォーマリズムを強調する詩現實同人金北原の態度は韓国詩文学史で超現實主義のもう一つの收容方法を示す。金北原はブルジョア的傳統と獨創性、近代と文明の堅牢性を象徴する文学の慣習を越えようとするスターの詩的方法論に同意する。彼は超現實を作り出すフォーマリズムで言語と想像を抑圧する政治的現實に対応する新たな創作方法論を發見し、これを積極的に受け入れたいたことを理解することができる。

5. 満州モダニズム、「満鮮日報」と『詩現実同人集』

<詩現実同人>は「満鮮日報」を拠点に超現実主義とフォーマリズムをベースとする満州モダニズムを実験的に示している。小泉京美は満州アバンギャルド芸術で「満州詩の知性」を高く評価した。これは詩人たちが詩と現実との関係を詩的方法の領域の中で探索したためだと説明する。非合理的なものが合理的なものに代置される現実を描き出す瞬間、それは現実と対峙する政治性を持つようになる。

満州の国策事業の理念と芸文指導要綱が存在したが、作家たちは「芸術家の個性と美意識」を確認した。このような特性のため、1940年代初頭満州はもちろん、日本と朝鮮でもアバンギャルドとモダニズムの芸術家は政治犯に退却するしかなかった。<詩現実同人>は、同人の名前に詩と現実を並べて、現実への関心を明らかにすることで超現実主義の歴史性を明らかに現す。満州モダニズムの空間でこれらの実験的で前衛的な詩形式を通じて政治的色彩を明らかにしようとしたことが理解できる。

5. 満州モダニズム、「満鮮日報」と『詩現実同人集』

この意味で「越境のアバンギャルド」の著者波瀾剛が、「1930年代後半日本と朝鮮の文学及び芸術の場で、アバンギャルド、すなわち、超現実主義が徐々に共産主義で、あるいは国策に抵抗する証拠として認識されて行って、超現実主義の芸術家たちが掲げる、アーティストとしての自意識を明確にすることと芸術の独自性を見つけることがすべて政治的抵抗の象徴性を持つことと解釈されることで、戦時下で芸術的前衛が政治的前衛という予期せぬ新天地に達した」という主張は説得力がある。

一方、このように満州の超現実主義の作品たちが実験性と政治性を含むことができたのは、満州芸術場の特性に起因したのものである。

このような特性で韓錫政は満州に帝国と植民地、民族主義と帝国主義を超える文化的な雰囲気が存在したことを話しているが、これは波瀾剛が設定した地政学的特殊性と合う次点でもある

6. 解放後の超現実主義と金洙暎

References

リュ・マン 『現代朝鮮詩文学』（解放後篇）、社会科学出版社、1988.

チャールス・アムストロン(CharlesArmstrong),『北朝鮮の誕生』2006.(The North Korean Revolution, 1945-1950)

金眞禧,「金洙暎の文学と超現実主義」2018.

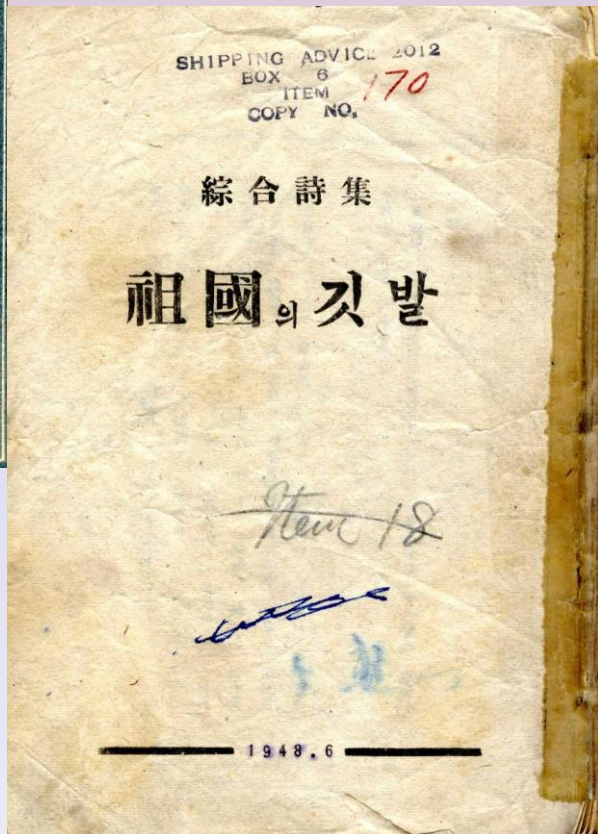
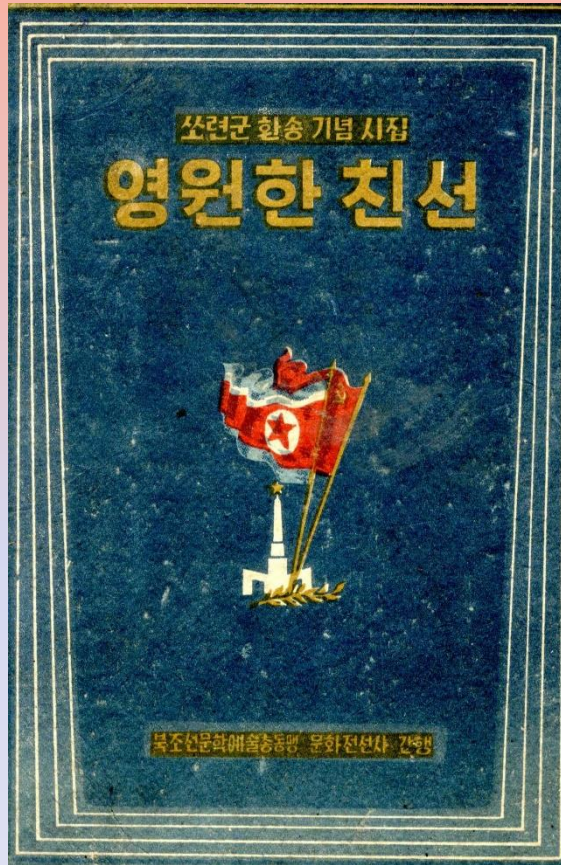
金眞禧,「金北原の文学史的復元と解放期活動研究」2019.

解放後韓国の文壇の超現実主義は朴寅煥（パク・インファン）が運営していた書店「茉莉書舎」を中心に継承された。ここでは、1930年代以降、超現実主義の文人として活動していた金起林、李時雨（「三四文学」）、趙宇植（チョ・ウシツ）、吳章煥（オ・ジャンファン）と解放前後活動を開始した朴寅煥、裴仁哲（ベ・インチョル）、金炳旭（キム・ビョンウツ）、林虎權（イム・ホグアン）などの詩人が集まって画家たちも参加した。

解放期の韓国の文壇でアバンギャルドは前衛的政治性を強調する方向に向かっていったと思われる。「朝鮮文学同盟」の指針を反映した「前衛詩人集」（1946）の出版や吳章煥、朴寅煥、裴仁哲、金炳旭などの文学は超現実主義を理論的に継承しながらも、政治的前衛としての特性を含まれていた



(1) 解放後の北朝鮮の文壇

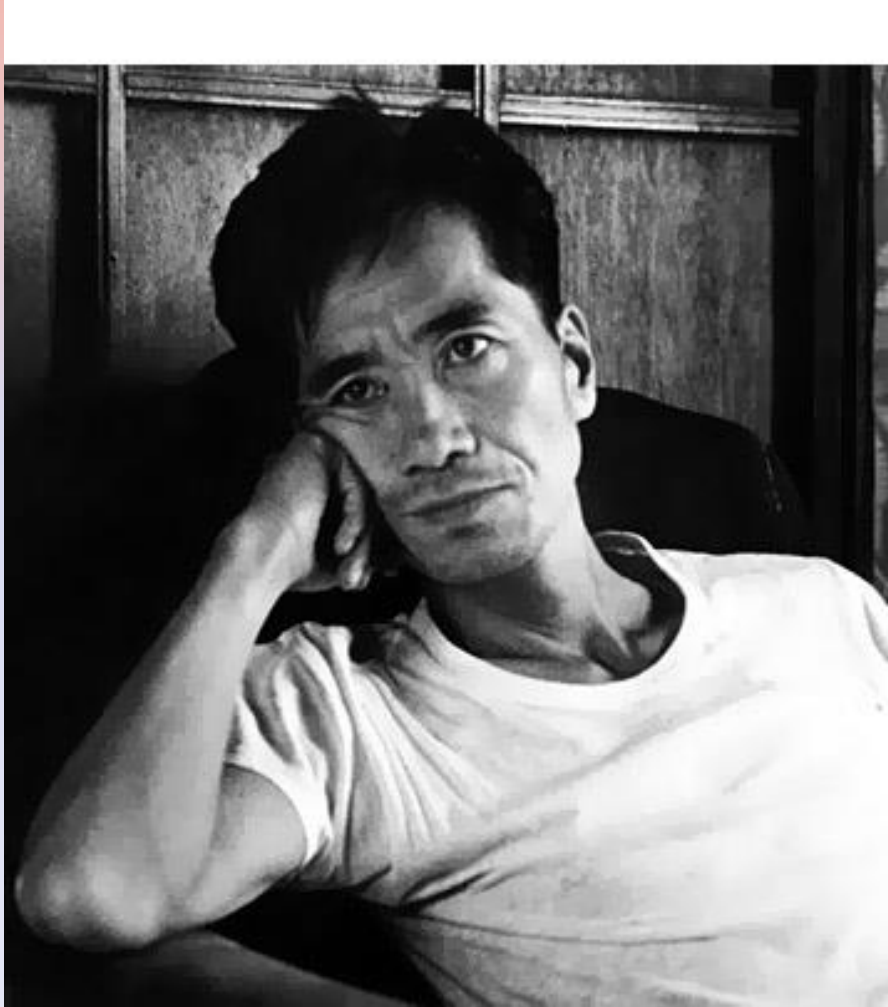


解放直後、北朝鮮では平壤芸術文化協会（1945.9）が作られ、この団体と対立して平安南道地域のプロレタリア芸術同盟も作られた。このとき活動した詩人の多くは、「断層」、「獏」、「詩現実同人」などである。彼らは同人誌と一緒に活動した画家たちと一緒に北朝鮮の革命に同調し、ソ連を賛美して、金日成を崇高化する作業に喜んで参加した。

解放前咸鏡北道鏡城や平壤などの自由で進歩的な雰囲気の中で多くの詩集と同人集が出版された。1947年に北朝鮮の創作方法が決定されるまでは、このような雰囲気の中で、元山で「凝香」（1946、画家李仲燮が表紙製作）、西北地域で「関西詩人集」（1947）、咸興で「文章読本」（1947）、新義州で「イエウォン・サークル」のような一連の出版物が出る事ができた。

解放期に出てきたこの詩集たちは全てモダニズム的な性格を持っているとは言えないが、基本的な土台は解放前の、幅広いモダニズムへの影響だと言えることができる。ところが、知られているように「凝香」、「関西詩人集」などが墮落的で退廃的だという理由で批判を受けた筆禍事件以後、北朝鮮の文壇でブルジョア反動思想、自然主義、芸術地上主義、形式主義などは一掃の対象になった。

(2) 金洙暎と超現実主義



韓国戦争を経ちながら韓国の文壇で超現実主義及び幅広くはモダニズム、あるいはアバンギャルドは難解詩という修飾語をもって伝統主義詩学から押し出された。その後、1960年代金洙暎によって召喚された。金洙暎は、4.19革命を契機に政治的革命の不完全さと向き合わなければならず、自分の文学を通じて未完の革命をどのように完成させていくのか考える過程で超現実主義に会った

金洙暎は政治的革命と芸術的革命は同時的なものだと考えながら、政治的、理念的画一主義に抵抗する自由の理念と参与詩を接続させる。参与詩の理論的土台として超現実主義を収容した金洙暎の論理は、超現実主義の社会的、時代的意義を強調した金起林の視点をより積極的に1960年代の韓国詩の場に受け入れたと評価することができる。